

沖縄近代史から考える「近代性」とアイデンティティの問い方

研究動向をめぐる一種の随想

戸邊秀明

一 本稿の目的および関心の所在

小文の目的は、沖縄近代史研究においていま必要な視点の探求にある。現在、琉球・沖縄史研究は大学や学界のなかで確かに認知されている。しかし、そのなかでも沖縄近代史研究は活発とは言い難い。これは奇異に聞こえるかも知れない。なぜならば、沖縄近代史研究は、ある時期まで沖縄社会が沖縄の「いま」を考える際に必ず参照されるものだったからだ。しかし、実際には、まさにそのような問題関心に即して探求が進んだ結果、「琉球処分」研究、太田朝敷や伊波普猷などの人物・思想史研究、沖縄戦研究のおおよそ三つに研究が集中し、沖縄近代

史の通時代的把握については、一九八〇年代以降、大きな進展は見られなかった^①。そのようななかで新たな問題提起を果したのには、ともに一九五〇年代半ば生まれの富山一郎と屋嘉比取の研究であった^②。だが後続の世代に大きな影響を与え続けている両者の研究にしても、残念ながら通史的な叙述の書き換えには結びついていない^③。

この一種の「停滞」の原因として、史料の残存状況が決定的な桎梏となっていることは比較的よく知られている。沖縄戦と米軍占領によって、琉球・沖縄史の一次史料は壊滅的な被害を被った。そのため、地域の近代史研究にとり、もともと基礎的な史料である新聞さえ、沖縄では系統的に読むことができない。

とりわけ一九二〇年代から沖繩戦までの期間に発行された地元新聞は、日本本土（折口信夫旧蔵資料）で見つかった一九三〇年代後半の数年分を除けば、切抜記事や植物標本の包紙としてかろうじて残った文字通りの断片から当時をうかがうしかない。研究が特に深まった前記三つの対象は、この期間を外して成り立ちうるものに限られる^④。このような史料状況が研究者の行く手を阻んでいた以上、まずは基礎資料の整備が進められたのは当然である。比屋根照夫に始まる思想史研究や仲程昌徳が積み上げてきた文学史研究は、そうした努力の結実である。

しかし問題は史料の不足にのみよるのだろうか。近代史の通時的な把握の困難とは、極言すれば、この期間の前後を含む二〇世紀前半の沖繩社会の変化をどのように見通すか、という問いに、歴史研究が取り組めていないことに起因するのではない。屋嘉比収は、地道な基礎資料整備の必要を常に訴えつつ、同時に歴史研究が単なる事実確認に自足することなく、他の学問分野からの問題提起に積極的に学びつつ、方法の錬磨を続けるようにくりかえし説いていた^⑤。屋嘉比が訴えた「基礎資料整備と方法的模索」という課題は、沖繩の近現代史研究の発展にとり、いわば車の両輪として、いまなお求められている。

屋嘉比のこの訴えに誠実に応えるかのように、沖繩近代史に関する二冊の研究書が、最近相次いで出版された。本稿ではこ

れを機会に、この二冊から「方法的模索」の達成点と問題点を抽出し、少しく批判的な検討を加える。その作業を通じて、沖繩近代史研究にとり、いま必要な視点について若干の問題提起を試みたい^⑥。

二 近年の沖繩近代史研究の達成と課題

——二冊の労作の検討を通して

二〇一四年は沖繩近代史研究にとって豊作の年だったと言える。教育史の照屋信治と音楽史の三島わかなが、それぞれの蓄積を一冊の体系的な「作品」として世に問うたからである。同世代によるこの二作——照屋信治『近代沖繩教育と「沖繩人」意識の行方』、三島わかなが『近代沖繩の洋楽受容』——は、従来の沖繩近代史像に書き換えを迫る労作であるとともに、多くの点で関心を共有している^⑦。それゆえ、現時点での研究の水準を確認するだけでなく、研究を進める関心の所在を推し量るためにも、二冊を同時に俎上にのぼせることに意味がある。

まず両書に共通する研究方法や視角について確認しよう。

両書はいずれも通史的な展望を提示することに力を注ぎ、近代の長期の社会変動のなかで、沖繩人教員の「沖繩人」意識や伝統音楽をめぐる「琉球的なもの」についての関心がどのよう

に発現するのみに注目している。従来、同化・皇民化による抑圧の時代として沖繩近代史を把握しがちな傾向に対して、近代沖繩人の「アイデンティティ」や「主体性」の実態について、系統だった史料にもとづいて通時的に検出し、困難な状況のなかでも「沖繩人」意識にもとづく「抵抗」や伝統をふまえた「創造」が持続的になされたことを実証している。

こうした刷新を可能にしたのが、両者が共通して注目した沖繩県教育会編集・発行の機関誌『琉球教育』一八九五―一九〇六年、『沖繩教育』一九〇六―四四年?の徹底した読解である。これは二つの意義を有する。

ひとつは、この史料群に着目することで、沖繩近代史研究において従来不可能とされてきた史料的一貫性にもとづく変化の検証と叙述が初めて可能になったということである。もちろん、雑誌も新聞と同様の受難を被っており、『沖繩教育』では、精力的な悉皆調査を経て、発行された号の約半数しか確認できていない。それでも、ひとつの媒体によって明治後半期からアジア太平洋戦争期まで、沖繩人の発言をたどれるのは同誌しかない。また掲載された論説は、教育論や教育会関係記事にとどまらず、教員を中心とした当時の沖繩人知識人の議論の空間を垣間見させてくれる。この豊かさは編集者たちの努力によるところが大きく、この媒体を仔細に読み解くことで、沖繩近代史

の多くの情報が汲み取れる。両者は、こうした特性を最大限に分析に活かして、前節で指摘した史料の困難に挑戦したばかりでなく、これまで決定的に弱かった戦間期の沖繩社会像について、明確な輪郭を、まだ決して太い線ではないにしても書き加えることに成功している。

もうひとつ、こちらの方がより重要だが、両書はともに沖繩における学校という場とその担い手たる学校教員に焦点を絞りこんでいる。いうまでもなく沖繩において学校は、同化政策の拠点であった。それゆえ、沖繩教育史は同化の面を基調として描かれてきた。しかし教員たちは国家の単なる伝声管ではなく、その構成も一様ではなかった。師範学校を通じて養成された多くの沖繩人教員が教育現場に現れたとき、学校も、そして教育会の機関誌もまた、大和人教員や大和人が要職を独占する県庁と沖繩人教員とが対峙する舞台となった。教員たちは日本化／西洋化の最前線に立たされることで、かえって自身の帰属性を研ぎ澄まし、葛藤を経験することになる。教育会機関誌というメディアは、そうした模索を一種集団的な作業として、読む者に提示してくれる。このような集団性をふまえて近代沖繩社会の文化的・思想的な変化の軌跡に着目することは、従来思想家研究とは異なる位相、いわば近代沖繩知識人の社会史的理解を可能にする。教育史の照屋はもとより、三島による宮良長包

や山内盛彬らの音楽教員に対する検討も、「教員社会」における音楽受容の広がりの中で包括的に位置づけられている。

以上のように、両書は「基礎資料整備と方法的模索」の両面で新生面を切り開いた。ところが、両者は互いの既発表論文を参考文献表にあげながらも、一見すると奇妙なほどに、方法のレベルでは没交渉のようだ。次にこの点、両者の方法の相違点とそのすれ違いが意味する問題について指摘する。

照屋が「沖繩人」意識を沖繩人教員の言動から炙り出す際に参照枠組としたのは、台湾史や朝鮮史で一潮流となっている「植民地近代性」論など、近年の植民地研究の成果から引き出した「エスニシティの政治化」という論点である。沖繩人教員は沖繩社会のなかでもっとも近代的な場と価値観に身を浸しながらも、日本社会からの差別に苦しみ、かえって自己のエスニシティ、すなわち「沖繩人」意識を表出せざるをえず、それは鋭い緊張を惹起した。このミクロな政治化の動態は、教育会機関誌を舞台として、大和人教員の圧倒的なヘゲモニーのもとでもさまざまな「戦略」を駆使した「抵抗」として現れる。したがって、照屋の著書で検出される「アイデンティティ」とは、常に「沖繩人」意識との関連で論じられるため、エスニック・アイデンティティを意味する（以上、T二二三〜三〇頁）。

他方、三島は音楽史研究における西洋音楽受容の研究で用い

られる枠組みに比較的忠実に、洋学の「直接的な摂取」↓「反転現象」（異文化との接触による自文化意識の活性化段階）↓「クロスオーバー」（「自意識を昇華」して洋学とは異なる音楽を創造する段階）という段階的変化する理論を参照する（M一六〜一七頁）。これにもとづきながら、日本の西洋音楽受容史（その裏面としての日本の音楽の自覚史）と対比させるかたちで沖繩における西洋音楽の受容とそれによって生じる沖繩の伝統音楽の「発見」と洗練の過程を検証している。近代沖繩の音楽論の展開や演奏会文化の普及と変容に関する三島の分析は、思想史と社会史の間隙を埋める独創的な研究と言えよう。

一方の教員たちの「沖繩人」意識、他方の音楽における「琉球的なもの」の自覚、いずれも近代を体験した沖繩人が日本帝国の抑圧にさらされて元来持っていたアイデンティティを喪失するという類の単線的な歴史像を拒否し、いわばもっとも近代的なものに接近し、包摂されたはずの教員たちにおいてもなお、ではなく、彼らだからこそ、沖繩／琉球というエスニック・アイデンティティの覚醒を見たことを、実証的かつ詳細に描き出す点で、両者は共通する。にもかかわらず、両者がアイデンティティの発現を見出す際の視角はかなり異なっている。

三島は、従来の研究や評論が、沖繩が被った同化の抑圧を批判しようとするあまり、近代を否定的に捉え、音楽受容から新

たに沖縄の音楽を創造した沖縄人の主体性を捉え損ねていると批判する。また沖縄の伝統音楽の価値を評価した者は沖縄人に限らない以上、「県外出身者による功績」と「本県出身者の動向」との関係を含みこんだ「文化触変や文化創造の際に生じるダイナミズム」に注目するよう訴える（以上、M二一―二七頁）。ここでは、沖縄人と大和人との対立面よりも、両者が学び合い、影響し合う関係を重視し、そこで現れた「琉球的なもの」へと向かう積極性を、著者は「主体性」と評価している。

これに対して照屋は、『沖縄教育』を沖縄人教員と大和人教員・教育行政との「抗争の場」として捉え、そこから実際の教育現場における種々の権力関係と緊張に密着して議論を展開させる（特にT第三章）。三島の分析は、個々の論者の完結した理論の対比と系統関係を重視しており、直接的な論争や緊張関係の構図を描くことはほとんどない。

もっとも照屋も、沖縄人教員による日本の郷土教育論や言論の旺盛な摂取と沖縄に適用させるための模索をたどっており、それに応じて「沖縄人」意識が可変的・流動的な様相を示すと指摘する。これは「反転現象」や「クロスオーバー」の段階に当たる。他方、三島も、県外出身者と沖縄人との緊張関係や大和人の音楽研究者の沖縄観に潜在するオリエンタリズムに対して批判的視点を有している。したがって、両者を対質させて

方法面での齟齬をあげつらうかのような批判は論外だろう。

むしろ問題としたいのは、史料をここまで共有し、実証で得られた新知見を相互参照することでより豊かな議論が期待できるにもかかわらず、両者の研究は教育史や音楽史の思考枠組に強く規定されており、「沖縄の近代」を共通に論じる土俵が創られていない、そうした現在の研究体制そのものである。各々のディシプリンが無意味だというのではない。鍛えられた研究視角と分析方法の強みは最大限に活かされるべきだろう。しかし、それは他のディシプリンのアプローチの特性との対比により、彼我の方法的差異を自覚することで、より効果的に発揮できるのではないか。

三 「植民地的近代」論の更新が 沖縄近代史研究に提起するもの

前節で指摘した問題点を克服するには、両者が意識していないがら、必ずしも明示していない領域を浮かび上がらせる必要がある。そこで参照したいのが、伊藤るりの論文「女の移動と植民地的近代」である。⁹⁰

伊藤論文は、戦間期の東アジア各地の大都市に出現したモダンガール像と実際の女性主体の言動から、「植民地的近代」の

諸相を、ジェンダー化され、資本と人の移動に媒介された植民地主義の問題として可視化するプロジェクトの一環で著されている。ここでは、那覇を中心に戦間期に現出した女学生文化における緊張と交渉、伊波普猷が主催した知的サークルに集った女性たちの解放戦略、新エリート層家族の「令嬢」の移動〔内地〕への留学・遊学、結婚、女医など職業的地位の獲得等〕が示す文化資本の意味が検討され、彼女たちが示す解放への志向性が植民地的近代の輪郭を縁取り、植民地主義の重圧を照らし出すさまが印象深く描かれている。

伊藤がとりわけ着目するのは、沖繩が戦間期に繋留されていた多方向への「移動ネットワークの展開」に女性が参入する際の媒介となる「教育と思想」の現場である。照屋・三島の研究との関連で重要なのは前者の教育であろう。新興エリート層の子女が集う高等女学校レベルの学校で醸成された女学生文化の動態に目を凝らすならば、学校という空間は「教員と生徒双方の移動ネットワークの結節点を成し、多様な文化が交錯する独特の重層的な社会空間」を構成し、まさに近代性が植民地主義の展開のなかで表れ、抗争の賭金となる場でもあった¹⁰⁾。そこでは服装、言葉遣い、礼法等に見られる「新しい美的センスをめぐる競争」によって帝国内の既定の民族序列を沖繩人女性が覆すことも可能であり、伊藤はそこに「大和化（＝東京化）」を逆

手にとり、これを徹底して追求することで元支配層の鹿児島県出身者をやりこめたり、同化の暴力をやり過ごし、逆に反撃に出るといふ、〈交渉される同化〉の局面¹¹⁾を見出している。さらに伊藤は、この「交渉」の過程を以下のように分節化する。

女学生たちは、学校のなかで培われた公的存在としての個人という感覚に基づき、かつまた新たに生み出された「沖繩人」としてのアイデンティティに基づきつつ、これもまた新しく生み出された女学生文化とそのなかの美的センスにおける卓越をめざす競争に刺激された。また、「ヤマトンチュ」と呼ばれる人びとを同質的集団と見なすのではなく、そのなかにもある差異と差別化の所在を見極め、いわば「ヤマトンチュ」の脱構築を図りつつ、なかがモダンでありうるかをめぐって、同輩や学校権力とのあいだでさまざまな交渉を行っていた¹²⁾。

伊藤論文の分析で、本稿の観点から注目すべきは次の三点である。第一は、「交渉」による主体性の発現をミクロなレベルで摘出し、それを可能にした条件として学校という場の流動性に着目する点である。第二は、帝国のヒエラルキーは人種・民族の序列によって構造化されているだけでなく、階級（資

本)やジェンダーによる差別の秩序と複雑に絡み合っており、それゆえその複雑さを逆手にとった戦略を劣位であるはずの沖縄人が(場合によっては)駆使できることである。第三は、人や物の移動と消費によって構成される近代性が越境性・混成性を不可避的にはらむため、解放の志向性は単純にヒエラルキーの上位の存在への同化には収斂しないことである。なお照屋著書の「植民地近代性」と伊藤論文の「植民地的近代」は同じ colonial modernity の訳語であるが、それぞれが参照している colonial modernity 論には差異があるようだ。そのため、前者が「同化・協力か抵抗か」という植民地の民族関係の狭間にある存在に迫るための補助線だとすれば、後者は階級やジェンダーによっても差異化・構造化される植民地支配の空間そのものを可視化する照明の役割を担っていると見えよう。

このような粗雑な紹介からでもわかるように、伊藤が「女の移動」から垣間見る「沖縄の近代」の読み解き方は、照屋・三島がそれぞれ重視する史料読解の着眼点と対立する別種のものというよりも、「交渉」や「混成」といった概念に表れているように、両者の方法を架橋し、方法的な対話を促進するはずのものである。

すべての社会がやがては単一の近代(典型的には高度資本主義社会・自由民主主義国家としてのアメリカ合衆国)に到達す

るという「近代化」の収斂理論は、一九六〇年代にアメリカが広めようとした近代化論がまさにそうであるように、ひとつのイデオロギーである¹³⁾。実際には、近代はそれぞれの社会において独自に受けとめられ、それ以前の社会秩序との交渉・葛藤を繰り返すため、近代性(modernity)の現れ方は諸社会ごとに異なった様相を持つ。つまり、資本の運動と帝国主義国家が推し進めた伝統社会の変貌は、前近代的要素と近代的要素のゼロサム的な函数で表現できるものでも、単一の近代に収斂する過渡期でもなく、複数の、混濁した近代性を各社会に生み出したのである。伝統社会の「後進性」や「封建性」なるものは、この過程で新たに解釈し直され、帝国支配の垂直的で権威主義的な構造に位置づけられていく。

二〇世紀前半の沖縄社会の変貌も、このような近代性の観点からあらためて理解すべきだろう。照屋と三島の研究は、豊富な知見と実に興味深い当時の論者たちの発見によって、この観点的有効性を支持している。けれども両者の分析は、前節で見たそれぞれの研究視角に制約されて、伊藤が示唆した「沖縄の近代」の複雑性とそれゆえに求められる史料の複眼的な読み方に比して、なお不十分なものとどまっている。

四 アイデンティティや

主体性への着目は何をもたらしたのか

本節では、前節で確認した視点をふまえて、両書からより具体的問題点を摘示してみたい。第二節で見たように、両書は近代の長期の社会変動のなかで、「沖繩人」意識や「琉球的なもの」についての関心がどのように発現するのかに着目している。それによって、近代沖繩人のエスニック・アイデンティティの動態や主体性の在処に迫ろうとするのだが、これらへの強い注目は、結果として史料が湛える多層的な文脈から著者たちを遠ざけているように思われる。以下、大きくは二つの点にわたって、この問題を考えたい。

1 エスニック・アイデンティティは独立変数なのだろうか

第一は、両書が重視するエスニック・アイデンティティにもとづく主体性以外にも、近代社会で主体化にかかわる重要な要素を、どのように史料から読みとるか、という問題である。ここでは、一例として階級性にかかわる文脈を考えたい。近代におけるもっとも重要な文化資本である音楽の嗜好をめぐって、三島は多様な史料を発掘している。とりわけ貴重な史料群は新聞、特にこれまでほとんど注目されなかった雑報的な催事や広

告の記事であり、可能な限り通時的に、伝統音楽論や演奏会の評価の変遷をたどっている。このとき、三島の分析の焦点は、西洋音楽の受容を経由して琉球伝統音楽がどのように社会的に位置づけ直され、またそれを主導した音楽教員たちの議論が「琉球的なもの」(さらには「八重山的なもの」)をどのように発見したかに絞られている。「琉球的なもの」という価値は、西洋や日本に対する独自の存在としての沖繩文化・「沖繩人」意識の自覚として抽出され、評価されることになる。だが、このようなカテゴリー表に振り分けるだけでは読解として不十分ではないか。

たとえば三島は、伝統音楽が近代沖繩人によって再発見される過程に注目している。明治末期には、それまで貶められてきた琉球伝統音楽に対する見直しが進み、琉球処分後、旧支配層の没落によって大衆演芸や辻遊郭などで無秩序に広がった伝統音楽の現状を憂い、琉球宮廷音楽の正しい保存と継承を訴える議論が新聞紙上で盛んとなる。この点に、三島は日本音楽史の知見を参照して、日本との「時差」を伴いつつも、伝統音楽の再発見が沖繩でもなされたことに、アイデンティティの覚醒を讀みとっている(M九三〜一〇一頁)。

同時に、この再発見⇨再評価の在り方には、音楽学的に見て「音楽外的側面」からの評価と「音楽内的側面」からの評価と

があり、明治末の変化は、音楽を帰属する階級に関連させて評価する前者の段階にとどまっていた。後者の思考は山内盛彬の評論に代表できるものの、稀であった（M一〇二〜一〇四頁）。

三島は興味深いことに、前者の「音楽外的側面」による伝統音楽の再評価について、当時没落していた旧首里王府の支配層が自分たちの階級的な地位を維持するために、那覇を中心とした新興市民層との差異化を図ろうと打ち出した戦略であると、階級性の問題を示唆している。さらにそれを受けて、「音楽外的側面―首里―旧支配層―前近代的価値観」と、「音楽内的側面―那覇―新興市民層―近代的価値観」と截然と対比するが、この指摘は「琉球的なもの」をめぐるアイデンティティの文脈とは有機的な関連が薄い（M一七〜一八頁）。

だがこれは奇妙ではないか。伝統音楽の低俗化を憂い、改良による復興を熱心に提唱したのは、（新興市民層の一員であるはずの）学校教員たちであると、著者自身によって指摘されているのだから。彼らが伝統音楽を擁護し、その低俗化を憂えるのはなぜだろうか。ここで着目すべきは、教員一人一人の出身階級如何ではなく、教員という近代に登場した新興階級が、一方では日本と、他方では沖縄内部の社会と、それぞれどのような関係を取り結び、自己の地位上昇を図ろうとしたのかという一種の階級戦略の側面であろう。

明治末期の国粹主義的風潮が瀰漫する帝国日本のなかでは、西洋の学術体系によって「国文学」や「邦楽」が西洋の芸術に劣らぬ存在として評価され、関連知識が体系化されていく。この時代に、新しい動向に敏感な教員たちが「琉球的なもの」の「古典」として琉球宮廷音楽を発見したのは、日本の伝統音楽の一支脈として組み入れうる、すなわち「日本的なもの」に包摂される資格を備えた存在として、旧社会の高貴な身分に帰属する音楽を見出したからではないのか。しかもこの「発見」は、教員たちが新興市民層として沖縄内で地位の上昇を図ろうとする際に、経済資本に乏しい彼らが身にまとい、他と差異化するために編み出した戦略、すなわち旧支配層の文化資本を新しい社会に適合的に「改良」して横領する、あるいは旧支配層と文化資本を融通することで階級的な融合を図り、身分的な上昇を実現しようとした表れではないのか¹¹⁵。

三島が発掘した明治末の伝統音楽をめぐる沖縄県内での議論も、西洋―日本―沖縄―沖縄内の階級を貫いて表れる帝国主義世界の民族／階級／ジェンダーのヒエラルキーを前提としているのであり、伊藤論文が示唆する沖縄における「植民地的近代」の典型的な表れがここに見られる。確認するが、私のここまでの批判は、三島が重視した「琉球的なもの」を軽視してよいと考えるからではない。なぜ、あるときに、ある人々が、

「琉球的なもの」をわざわざ対抗的言説として表現するのか、それはどんな意味があるのかを、よりミクロな関係性や個々の論者の発話の場面にまで降り立ち、深く掘り下げて思考したいからだ。それを抜きにすると、「琉球的なもの」の表徴の検出作業は、沖繩人の主体性の在処を問いたい、という三島の本来の課題と乖離してしまうのではないだろうか。

2 戦時期の思想をどう読みとるか

第二に、両書が採用した「沖繩人」意識や主体性の検出方法では、日中戦争以降の表現が適切に読解できるか、という問題がある。照屋の著書に即せば、これは沖繩方言論争前後の教員の言語論を扱った、同書のなかでももっとも読みごたえがあり、旧来の研究を大きく刷新した第六章の内容にかかわる。この章の初出である投稿論文に対して、私はすでに掲載誌の求めに応じて「論評」を寄せている¹⁵。そこでの批判の全部を繰り返すことはせず、照屋が著書で書き加えた応答（T二八八頁）に対して、私の批判の意図を説明することに重点を置きたい。

先の拙稿では、照屋が「沖繩人」としての主体の存立の余地を確保しようとする¹⁶ものとして評価した学校教員（真栄田義見や兼城静）の言語論を、「むしろ流行の言辞を模倣した動員に奉仕する論理として機能した」のではないかと疑問を投げかけ、

それを「マイノリティの倒立した主体化のありさま」と見ることはできても、照屋のような積極的な評価は受け入れがたい、と批判した。これに対して、照屋は私が批判の根拠として挙げた他の「動員に奉仕する論理」（朝鮮における内鮮一体論や京都学派の田辺元の哲学による「種の論理」）との共通性をめぐって、同時代の思想史のより広い文脈を押さえていないことをたしなめたものと受けとめたようだ。今日の戦時期思想史の研究水準からすれば、もちろんその要素はあるが、私が問題にしたかったのは別の論点であった。

ひとつは、日中戦争以前と以後とで、思想の有効性の文脈が大きく変わってしまうために、照屋が重視する戦前・戦時における真栄田や兼城の主張の一貫性を確認しても、それだけでは自立や抵抗の存在を論証したとは言えないということだ。

日中戦争を通じて初めて本格的な総力戦段階に入った日本帝国は、一方で内外に戦争の正当性と戦争目的を高唱するため、西洋的な価値に総体として対峙できる日本の価値を洗練すべく、さまざまな学知を動員した。他方で、帝国の各社会階層から自発的な戦争協力を引き出すために、日本の価値に包摂していくことで、さまざまなマイノリティに地位の上昇を期待させた。もちろん、この包摂は、マイノリティにとって自分たちの属性を否定することを意味する。しかしそれは、たとえば「方言」

の解消が、「日本の普通の感情と思考の中に抱擁されて」「高次の段階に進んだ沖繩的のもの発展的な姿」であると捉えられ、むしろ解放への道程として渴望された。これを、「沖繩人としての主体の存立の余地を用意しようとする」と読むことはできないのではないか（T二七一頁）。

なるほど、彼らの一九三〇年代前半の言説は「方言」に対して積極的価値を見出そうとしたのだとしても、それはあくまで帝国日本を豊富化する一「郷土」としての独自性であった。それでも当時は、大和人教員や日本の一般的な沖繩認識に対して沖繩を擁護する機能を持ち得ただろう。だが、大東亜に勇躍するにふさわしい海洋性を備えた大和民族としての沖繩人なるものが語り出されるとき、そこで維持されているという「沖繩人」意識は、抵抗の武器ではなく、沖繩の民衆を戦争に駆り立てるものに変貌する。とりわけ戦時期の思想を読みとる際には、文言上の一貫性だけで解釈はできない。短期間に激変する言説空間の価値軸のなかで、ひとつひとつの発言がどのような機能を持ったのかを、あわせて検討する必要がある。

同じ問題点は、三島の分析にも見られる。山内盛彬が一九四三年に発表した論文を分析した三島は、琉球古典音楽の音階論を打ち出したこの論文を、「世界的な視野における文化史構築の観点から琉球古典音楽の位置づけを試みた」と評価し、その

壮大な論じ方は山内の世界観が「脱西洋コンプレックスの域に達していたからこそ」とする。だが三島も引いているように、山内はこの論文の意図について、「日本民族が世界指導者となる適性を史実で証したい」と述べている。それを、「山内は「日本民族」を「世界指導者」として位置づけるために、その鍵となるのが「琉球」の存在だと考え、しかも「琉球」が鍵であることを証明するために世界の音楽文化の起源から解きほぐさなければならぬと考えた」と、何の留保もなく著者は評価する（以上、M一一一～一一四頁）。

この山内論文の内容が著者の位置づけ通りならば、山内の論じ方の壮大さは、日本文化・日本思想の「世界性」を弁証しようとする一連の「世界史の哲学」や、平野義太郎に典型的なように大アジア主義を正当化するために日本とアジアの文化的近親性を自然・社会科学を総動員して論証しようとする「民族・政治学」など、アジア太平洋戦争期に簇生する同時代のさまざまな思想や学問の動向と構えを共有しているのではないか。また山内の論調は、沖繩の「日本民俗学研究学徒」として戦時期に「大東亜民俗学」の必要を説き、日本文化と南方文化の結節点としての沖繩文化の意義を称揚した源武雄（彼も教員だった）の口吻を彷彿させるものではないか¹⁶。実際に山内論文を読んでみると、そのような疑問を抱かざるをえないのだ。

ここで私は、山内に戦争協力のレッテルを貼り、当時の思想流行の末端に連なっているだけだと貶めたいのでは全くない。

むしろ、山内が時代のなかでさまざまな学問潮流を摂取して独自に琉球音階論を打ち出した独創性自体は高く評価されるべきだろう。しかし、彼が沖繩の音楽を人類史に位置づけて評価を確固たるものにしたと願った渴望感¹⁷は、戦時期にそのまま表現すれば、「日本民族」の「世界性」を「史実で証」すことで動員の論理に奉仕する機能を帯びた。この点を確認することと、彼の学問の独創性を評価することとは両立する。

だが、三島が積極的に評価しようとする類の「主体性」を、ここに読みこむことには強く疑問を抱く。そこに見出せるのは、「マイノリティ」の倒立した主体化のありさまであり、日本帝国内での沖繩の発展を念願した近代沖繩知識人の破綻が示す栄光と悲惨そのものではないか。それを正確に位置づけることが、研究に課せられた第一の役割だろう。

照屋に対する批判のもうひとつの意図は、すでに三島に対する疑問であらかた述べている。照屋の分析では、真栄田や兼城の、知識人として、教員としての戦争責任はどのように問題化できるのだろうか。学校教員を対象とする以上、近代教育史において、この問いを避けることはできない。真栄田義見がアジア太平洋戦争期に県庁の要職に就くことができた背景には、彼

が新聞等に発表した戦意高揚の論説があった。そして、戦場となる直前に沖繩で学徒隊を結成させる命令にかかわりながら、九州疎開学童の視察を理由に沖繩を離れ、地上戦を体験しなかったこの人物の言行を、戦場を生き延びた戦後の沖繩人は決して忘れなかった¹⁸。このような真栄田の言行に照屋が見出す「沖繩人」意識とは、どのように「抵抗」の機能を有するのだろうか。

以上をふまえて私の批判をまとめた。「沖繩人」意識や「琉球的なるもの」の抽出によって、沖繩人のアイデンティティや主体性の発言を論証しようとする、両者に共通する方法が大きな成果を収めたことは第二節で確認した。しかし、その抽出自体がいきおい自己目的化し、「琉球的なもの」あるいは「沖繩人」意識を即主体性の発現と考えてしまうならば、とりわけ戦時期の思想分析に端的に現れるように、大事な文脈を捉え損ねてしまう。

エスニック・アイデンティティと他の要素（階級・ジェンダー等）との連関、戦時期思想の評価、いづれについても沖繩人の主体性を検証する際には、抑圧され、動員された当の主体である民衆の視点に立った歴史研究、すなわち民衆史的観点の徹底が必要ではないか。この観点を抜きにしては、どのような新しい概念を沖繩近代史研究に導入することも無意味だと、私は

思ってしまう¹⁸⁾。

五 批判の背景——むすびにかえて

最後に、この文字通りの拙い稿を綴ろうと考えた動機のようなものにふれて、終わりたい。

近年、沖縄では独立論が盛んであると言われる。これに対してさまざまな議論があるが、そこには、なぜいま、今日のよう新たな性格の独立論が出ているのか、という視点が欠けている。もっとも、私にも模範解答があるわけではない。ただ、次のような発言を読むとき、少なくとも今日の独立論の潮流に向きあう際に見逃してはならない情動の源泉のようなものがあるところにあると思う。少し長い引用したい。

日本語人になった私たちが沖縄戦を学び、もっと知りたいとインターネットで検索すれば、戦争体験者の想いとは真逆の方向に進んでしまうと言うことが起こるのは、日本語で沖縄戦を見るということは日本人の視点で沖縄戦を見ていることに他ならないという事実から私たちが目をそらした結果なのではないか。血のつながった祖父父母の体験談ではなく日本人が書いた沖縄戦に「正しさ」さえ感じてしまうというトラッ

プは、強制集団死を巡る教科書検定問題や八重山教科書採択問題でも浮き彫りになっている。言葉にできない違和感を覚えている間にも、一〇〇倍近い日本人により「正しい」「沖縄戦」のあり方が決定され沖縄の子どもたちに教えられていくのだ¹⁹⁾。

この引用を含む論説の全体を読めば、この著者は、「強制集団死」を殉国美談にしてしまうような日本社会の沖縄戦観と、それに体现される沖縄に対する差別構造を問題にしていることがわかる。だが、「日本語で沖縄戦を見ることがは日本人の視点で沖縄戦を見ていることに他ならない」と、問題の根源を「日本語」に求めるような書きぶりには、論理の飛躍がある。その背景にあるものを、右の引用の直前の文章が示唆してくれる。いまま少し引用を許されたい。

例えば比嘉豊光の「シマクトゥバで語る戦世」では、証言の中から他者である日本をはっきりと感じる事が出来る。「壕追い出し」や「強制集団死」の具体的な描写だけでなく、「日本語とは——引用者注」異なる言語から繰り出される音声や息づかい、生き生きとしたジェスチャーや表情の全てがワッターは日本人ではないのだという本質を物語っている。そ

れなのに画面に出てくる人々の孫世代に当たるとは私たちが彼らの戦争体験を日本語の字幕に頼らなければ理解できない程に同化されているのだ。同化政策とは大昔のポリシーではなく日々深化し洗練され今日も生きているのだ。もはや私たちは「なぜ私たちは日本人ではないと言いつけるのか」を、顔も知らぬ外国のお偉い学者の理論を持ってきてなお説明しきれないでいる²⁰。

ここには、深い喪失感から来る激しい回復の希求があり、それゆえに最後の文章に露わであるように敵しい自己嫌悪が見てとれる。しかも、奪われた当の文化を奪われる以前の自己自身を知らないことが物語られてもいる。今回の独立論は、これまでの独立論よりいっそう強く文化的な回復を、あらかじめ自分たちから奪われた民族的文化の回復というかたちで強く訴え、独立の最終的な目標と見定めている²¹。それは、右に見たような喪失感が、いまや沖繩社会の中堅となりつつある復帰後世代のなかで、一部にとどまらぬ広がりをもって共有されていることと関係があるろう。近代化のイデオロギーとそれを貫徹させた沖繩の急激な社会変容は、このような心身を生み出したのだ。

今後の沖繩近代史研究は、それがいかなる言語で書かれようとも、このような深い喪失感を受けとめつつ、同時にそこに発

する右のような歴史意識に対しては批判的に向きあうことを迫られる。そのとき必要となるのは、琉球処分以前の沖繩に文化の本質を求めるような視点ではないだろう。また「沖繩人」意識による「抵抗」の一貫性を論証するだけでも不十分だろう。

それは困難であっても、「沖繩の近代」が近代資本主義世界の権力構造に貫かれてあり、その上でなお、その構造とさまざまに交渉することで複雑な近代性を生み出し、抵抗を試みた人々が絶えずいたこと（ただしその抵抗が「沖繩人」意識や「労働者階級」意識のもとでなされるとは限らないし、ある時点での抵抗は次の段階では抑圧に転化することもある）を、徹底して「民衆史」の観点から描いていくよりほかにない²²。もちろん、その「民衆」もまた一枚岩の主体を前提とすることはできないが、だからこそ彼ら／彼女らの主体化の瞬間と集団性の動態とを読み取るための史料読解と方法意識が、私たちの専門性として求められているはずだ。本稿が、私と同世代の研究者が著した労作の、いわば胸を借りて考えてきたのは、そうした作業を歴史研究に携わる者の協働によって遂行することが、いまほど求められている時はない、と思うからである。

【付記】 本稿は、東京経済大学二〇一四年度個人研究助成費による研究成果の一部である。

(1) もちろん、個々の論点については、この三つの領域以外にも極めて高い実証水準の研究が現れている。一九九〇年代以降二〇〇〇年代半ばまでの沖縄近代史研究の動向については、さしあたり拙稿「沖縄」(友永健三・渡辺俊雄編著『部落史研究からの発信3 現代編』解放出版社、二〇〇九年)における概観を参照されたい。

(2) 富山一郎「近代日本社会と「沖縄人」——「日本人」になるということ」(日本経済評論社、一九九〇年)以降の富山の研究を参照。ただし、富山の研究は問題関心の一貫性とともに、時々の実象に対する批判的認識に応じて、議論の重点には変化が見られる。それを検証することは、いわば「沖縄近代史研究の同時代史」を見通すために必須の作業であろう。また屋嘉比の沖縄近代思想史の構想は、彼の早逝のため未完に終わったが、そのエッセンスは、遺作『近代沖縄』の知識人——島袋全亮の軌跡(吉川弘文館、二〇一〇年)に示されている。屋嘉比についても、彼の関心の推移をふまえて検証すべきであり、遺された発言の系統だった読解が必要である。

(3) たとえば近年の代表的な通史叙述といえる金城正篤はか『沖縄島の百年』(県民百年史47)、『山川出版社、二〇〇五年)は、「復帰」後の研究蓄積をよく反映しているものの、その基調はおおむね一九八〇年代に固まった見解の

反復となっている。これは、沖縄における近代史研究者の層の薄さ、研究の継承と更新の難しさとも密接に関係している。

(4) 知識人の思想史、とりわけ伊波普猷ら沖縄学の思想家たちについては、この期間を外すことはできないが、伊波たち沖縄学の第一世代は一九二〇年代以降、東京に移り住んでいるため、まだしも活動が追える。これに対して、沖縄学の第二世代ともよぶべき人々には郷土に生き続けた者が多いため、遺された史料が少なく、今日まで正当な評価を得られていない(屋嘉比前掲書プロローグ「沖縄学の群像」を参照)。

(5) 屋嘉比「基礎資料整備と方法的模索——近代沖縄思想史研究の現状と課題」(『史料編集室紀要』二五号、沖縄県教育委員会、二〇〇〇年)。

(6) このような関心から稿を起こしているため、以下の指摘は二冊に対してあくまで部分的な言及にとどまる。本来は作品全体の構造や問題関心に即した紹介と評価が必要だが、別の機会に譲らざるをえない。「一種の随想」と題した所以である。この点、あらかじめ二人の著者にお詫びしなければならぬ。

(7) 照屋信治『近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方——沖縄県教育機関誌「琉球教育」『沖縄教育』の研究』(深水社、二〇一四年)。三島わか『近代沖縄の洋楽受容——伝統・

創作・アイデンティティ』(森話社、二〇一四年)。以下、両書からの引用・参照では、照屋著書を(T〇頁)、三島著書を(M〇頁)と本文中に記す。照屋は一九六九年生まれ、三島は一九七〇年生まれ、どちらも沖縄で育っている。したがって今回の二者は、アメリカ世の記憶がほぼない世代による、初めての体系的な沖縄近代史研究の出現を意味する(両書の「あとがき」を参照)。研究者が生きた時代環境と作品の関係を問う史学史的な関心においても見逃せない。

(8) 両者はそれぞれ独自に『沖縄教育』の検討を始めたが、藤澤健一と近藤健一郎が進めた『沖縄教育』の徹底した悉皆調査と復刻版刊行(不二出版、二〇〇九—一三年)へと至る作業、さらにそれと並行した共同研究にかかわった経緯も影響しているだろう。共同研究の成果も二〇一四年に刊行された(藤澤健一編『沖縄の教師像——数量・組織・個体の近代史』榕樹書林)。藤澤と近藤による一連の研究組織の献身的な運営自体が、沖縄近代史の若手研究者間のネットワークングにとり、貴重な機会となった。

(9) 伊藤るり「女の移動と植民地的近代——沖縄のモダンガール現象への接近」(伊藤はか編『モダンガールと植民地的近代——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店、二〇一〇年)。伊藤論文については、照屋・

三島の両書とも参照していない。

(10) 同前二・三六頁。

(11) 同前二・四二頁。

(12) 同前二・四三頁。

(13) 参照、ハリカ・ハルトゥーニアン(平野克弥)訳『アメリカ(帝国)の現在——イデオロギーの守護者たち』(みすず書房、二〇一四年)。

(14) もちろん、宮良長包や山内盛彬が、このような、俗な意図を秘めて高尚な音楽論を論じていた、などと言いたいのではない。詳しい説明は省かざるをえないが、ここで前提しているのは、ビエール・ブルデューによる文化資本をめぐる「卓越化」の理論である。前掲伊藤論文が女学生文化における沖縄人女性の「卓越化」の戦略を論じる際に念頭にあったのも、同じであろう。なお、教員(男性)の再生産を担う師範学校が、那覇ではなく首里に置かれたことは、文化資本の配置という空間論的な問題と関連して検討が必要であろう。拙稿「論評」(照屋信治「沖縄方言論争」と『沖縄教育』誌上の「標準語」教育論——「混用」という可能性」に対して)(『日本教育史研究』三〇号、二〇一二年)。

(16) たとえば、高山岩男『日本の課題と世界史』(弘文堂書房、一九四三年)、平野義太郎『大

アジア主義の歴史的基礎』(河出書房、一九四五年)などがすぐに念頭に浮かぶ。また源については、屋嘉比収「古日本の鏡としての琉球——柳田国男と沖縄研究の枠組み」(『南島文化』二二号)、沖縄国際大学南島文化研究所、一九九九年)の第三章をぜひ参照されたい。

(17) この点については、拙稿「戦後」沖縄における復帰運動の発端——教員層からみる戦場後/占領下の社会と運動』(『日本史研究』五四七号、二〇〇八年三月)一一一〜一二二頁を参照されたい。

(18) この段落の批判は、おそらく照屋には的外れに聞こえるだろう。照屋は著書の序論で、思想家の鹿野政直の文章を引き、鹿野の民衆思想的アプローチの衣鉢を継ぐ姿勢を明示しているからだ(一七八頁)。しかし、本文で指摘したように、照屋の分析には、沖縄人知識人としての教員の苦悩の理解に比して、支配の末端としての教員であるがゆえに責任を問われる主体であることを前提にした歴史的评价が蔑ろにされる傾向が、後の章になるほど色濃い。苛烈な時代を生きた教員には酷だが、教導の対象とされた生徒や民衆の視点から、彼ら彼女らの言動を捉えることは欠かせない。戦後の沖縄人教員を分析の対象とする

(19) 者として、もとよりこれは自戒の弁でもある。親川志奈子「ディスコネクトされた歴史と私を繋ぐ」(『N27』二号、二〇一三年)三四頁。一九八一年生まれの著者は、琉球民族独立総合研究会の理事の一人でもある。

(20) 同右。

(21) 独立論の中心的な理論家として活発に発言している松島泰勝によれば、「民族としての尊厳の回復、米軍基地をはじめとする現在の差別状況の解消、現前する戦争リスクの回避、そして「まったく新しい価値」の創造が、独立のモチーフとなっている」(松島『琉球独立論——琉球民族のマニフェスト』バジリコ、二〇一四年、一八四頁)。

(22) ここでスケッチした観点での、私なりの沖縄近代史研究が、沖縄方言論争の読み直しである。さしあたり以下を参照されたい。拙稿「一九三〇年代沖縄の産業振興と地域自立の課題——帝国内部での摸索」(『西英通ほか編』ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ——多文化の歴史と地域史)岩田書院、二〇〇五年)、同「方言論争」をたどりなおす——戦時下沖縄の文化・開発・主体性」(勝方『稲福恵子ほか編』『沖縄学入門』昭和堂、二〇一〇年)。